スイートプリキュア＆仮面ライダーキバ＆W 心の音楽とそれぞれの想いと覚悟

TH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スイートプリキュア＆仮面ライダーキバ＆Ｗ　心の音楽とそれぞれの想いと覚悟

【Ｎコード】
Ｎ３１１２Ｚ

【作者名】
ＴＨ

【あらすじ】
音楽の街。加音町。この町にプリキュア達とは違う覚悟を持っている者たちがいた。一人は運命の鎖を解き放ち、愛する少女と音楽と親愛なる友のために戦う者。一人は心から大切な少女を守るために友と共に運命に挑む者。一人は故郷と友を裏切ってしまい死んでも償えない罪を持つ者。一人はある少女の父親を救うため、ある男の復讐するために戦い続ける者。その想いが一つになる時、彼らは仮面ライダーとして覚醒する！

スイートプリキュアと仮面ライダーキバ、Wのコラボです。ちなみにイクサとサガは出ません。イクサとサガが好きなみなさんすいません…

プロローグ

「まて！」
「逃がさんぞ！」
とある世界。そこに怪物たちが何かを追っていた。追っていたのは2匹のコウモリだった。彼らの名は『キバット2世』と『キバット3世』だった。
「くそ！父ちゃんどうする！？このままじゃあいつ等に捕まるぜ！？」
「……こうなったら別れよう。しばらく会えねぇかもしれねぇ。それでもお前は『アレ』持つのにふさわしい奴を探せ！そしてあいつ等と戦うんだ！」
「じゃあ、父ちゃんはどうするんだよ！」
「オレも逃げるぜ…そしてまたお前の所に行く！」
「わかったぜ…だけど絶対に戻ってこいよ！」
「ああ！しばしの別れだ！我が息子よ！」
「ああ！父ちゃんも死ぬんじゃねぇぞ！」
「いたぞ！こっちだ！」
2匹は二手に分かれた。怪物たちも別れたコウモリを追いかけた。

第1話　いつもの日々

加音町のとある住宅街。そこにある一軒家に一人の少年が住んでいた。彼の名は『仲村春樹』。聖アリア学園2年生である。
「いってきまーす」
春樹が玄関に出ると玄関の前に一人の少年がいた。彼は『立花勇二』。春樹と同じくアリア学園中等部2年である。
「おはよう。春樹」
「オス！勇二」
春樹と勇二は幼稚園のころからの幼馴染であり、かなりのなかよしである。　学園ではかなりの有名である。2人は会話をしながら登校するが校門に着くと突然春樹はダレ始めた。
「春樹どうしたの？」
「あ～もう着いちゃったよ～…嫌だ～行きたくない～…」
「なんで嫌なの？」
「勉強が嫌なんだよ～…」
そんな春樹を見て呆れる勇二。しかしそんな春樹を唯一やる気を出させる方法があった。
「……響に会いたくないの？」
勇二の言葉を聞いた春樹はさっきとは別人のように立ち直った。
「よっしゃ！行こうぜ！」
「単純な奴…」
春樹と勇二は校舎に入ると春樹は2人の女子生徒に気付いた。
「お！噂をすれば！勇二！いつものやるからお前もやれ！」
「いいよ僕は」
「いいから！」
春樹は強引に勇二を引っ張り静かに2人の女子生徒に近づき、2人の女子生徒に目を隠した。
「だーれだ？」

「「キャ！」」
女子生徒は見事に驚き小さい悲鳴を出した。この二人は春樹と勇二の幼馴染の『北条響』、もう一人は『南野奏』だ。
「もう春樹！いつもそれはやめてってば！ビックリするんだから！」
「勇二も何で止めないの！」
「僕はいつも止めているよ。春樹が強引にやらせるんだよ」
「全くいい加減慣れろよ～。やるの俺だけなんだからさ」
これが春樹と勇二の日常だった。
「そう言えば勇二。お前今日日直じゃあねぇの？」
「あ、そうだった。って君が強引に―まぁいいや。じゃあ僕、さきに教室にいくね」
勇二は3人に言い残し教室へと向かった。
「じゃあ俺達も行こうぜ」
「あ、こら春樹待ってよ！」
「待って2人ともー！」
春樹達も教室へとむかった。そんな所を見ていた怪物が見ていた。
「ここか…ここに『キバット』が…」
そして春樹は気付いていなかった。彼はもうすでに運命の戦いに巻き込まれたことを

第2話　謎の怪人達と変身

加音町の調べの館前。そこにコウモリがいた。
「ここか…ここに『鎧』にふさわしい奴がいんのか？ん？」
キバット3世はある老人がいるのを気付いた。音吉だった。
「音吉…？音吉じゃねぇか！！」
「ん？お～キバットではないか」
「久しぶりだな～。元気だったか？」
「ああ、この通り元気にしておるよ。ところでまたなぜこの世界に？」
「それがよ…あいつ等が封印から目覚めてしまって…だから『鎧』の所有者の子孫を探してんだよ。」
「そうか…奴らがまた…しかしその者は自分を知ったら苦悩するはずだろう…あれは『ファンガイア』の血を持つ者でなければならんかな」
調べの館から過ぎてアリア学園の教室では―
いつもの授業。春樹は退屈そうにしていた。
「あ～…暇だ…」
「春樹。授業ぐらいちゃんとしなよ」
「オレは体育以外はやる気で無いんだよ…」
「音楽だけはシャキってするのに？」
「音楽は別だよ。だって加音町の住人だし」
「将来有望なヴァイオリニストだもんね」
「別に。俺はそんなにうまくないし」
春樹と勇二は先生が黒板を後ろを向いている隙に会話をしていたその時だった。
ジリリリリリリリリ！
突然警報が鳴り生徒達は驚いた。
「な、なに！」

「なんだ！？」
生徒達は慌て始め、混乱状態になった。すると突然教室の外側の窓がバリーンと割り、外から怪物が入って来た。怪物を見た生徒達は一目さんへと逃げ始めた。
「何だあれ！？」
「どこだ…？『キバの子孫』はどこにいるんだ！？」
「キバ…？」
「おい小僧！『キバの子孫』は何処だ？」
「何だよいきなり現われてキバとかなんだかわけのわかんねぇこと言いやがって、そう言うお前等は誰なんだよ！？」
「我らはファンガイア！人間を超えている存在さ！」
「ファンガイア？ハッ！何が人間を超えた存在だ。ただの弱い者いじめじゃねぇか！！」
「フン！人間風情でありながら威勢だけはいいな。ここにいた人間はお前以外逃げたし、お前の『ライフエナジー』をいただくぞ！」
ファンガイア達は一斉に襲いかかって来たその時だった。
「「「プリキュア！トリプルハーモニーキック！」」」
「ぐわ！」
突然ファンガイアの横に少女の3人がキックを放った。キックしたのはマゼンタ色の衣装の少女と白の衣装の少女、そして青の衣装の少女だった。
ファンガイアは壁にたたきつけられて怒りの声を上げながら！！
「おのれ！何者だ貴様ら！」
「爪びくは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」
「爪びくはたおらかな調べ！キュアリズム！」
「爪びくは魂の調べ！キュアビート！」
「「「届け！3人の組曲！スイートプリキュア！」」」
「プリキュアだと！？」
ファンガイヤ達は驚きながらプリキュア達を見ていた
（あれ…驚いてるのか？）

「そう！！私達はこの町を守る戦士！！プリキュアよ！！」
「これ以上人は襲わせないわ！！」
「無関係な人々を襲った事…覚悟しなさい！！」
3人はファンガイアを睨んで言う。
（あれって…最近この町に現われる怪物と戦っている『プリキュア』だ！すげぇ、生で見た！！）
春樹は目の前にいるプリキュアを見て少し驚いていた。
「大丈夫！？」
「あ、ああ。大丈夫だぜ」
「ここ私達に任せて、あなたは早く逃げて！」
「逃げるって、でもお前ら！」
「いいから早く！」
春樹は悔やんだ表情をしながらメロディ達と言うとおりに教室から出たが、春樹は校舎に出ず、廊下に隠れながら見ていた。
「逃げろって言われてもな…」
春樹はメロディ達に見つからないように教室を覗くとメロディ達はファンガイアをおびき寄せて校舎に出た。
「あいつら、マジであんな奴らを倒すのかよ…ちょっと心配だぜ…」
春樹はメロディ達の所をへ向かうため行内に出た。校庭に着くとメロディ達はファンガイア達と戦っていた。
「「「ハアアア！」」」
「「「うおおおお！」」」
「すげぇ…あんなのテレビでしか見ないのに……でもなんかプリキュアの方、苦戦してるみたいだけど…」
春樹の言うとおり、プリキュア達は少し苦戦していた。
「なんなのあいつら、トリオ・ザ・マイナーより強いよ…」
「あなた達は何者なの？トリオ・ザ・マイナーの仲間なの？」
「フン！我々を下等な奴らと一緒にするな！我々は『ファンガイア』だ！」
「ファンガイア？」

ビート以外は困惑する。
ビート「ファンガイア…まさか！！」
ビートは相手の正体を知って驚く！！どうやら彼女はファンガイアを知っているらしい。
「ビート、知ってるの？」
2人がビートに聞きビートがうなずいて手短に説明する。
「ファンガイア…人々が持っているエネルギー、『ライフエナジー』奪う魔物よ。でもファンガイヤは『キバ』に封印されたはずなのに…いったいどうやって！！」
少し動揺しながらビートは言う。
ファンガイアも少し驚きながらも冷静に言う
「ほお。貴様。我々や『キバ』のことは知っているのか。だったら話は早いな。『キバット』達はどこにいる！！奴には封印された恨みがあるんでな！！！」
突然凄みのある声で叫ぶ！！
メロディ「なにいってるの？キバットって？」
ビート「キバに変身させる力を持っているコウモリ型のモンスターの事よ。でも、キバはもういないはずだわ…あの戦いの後彼らは行方不明になって…」
コレを聞いたファンガイアは？
「そうか。キバはいないのか。フフフ！！これはまた好都合だな。奴がいたらライフエナジーを奪えなくなるからな～！！！」
そのファンガイア達は残忍な笑みを浮かべる！！
ファンガイア「だがまずは…邪魔なお前達だ！！」
そう言うと1体のファンガイアがメロディに襲い掛かって来た！！
「そんな事はさせない！！ハァァァァ～！！！！」
メロディはファンガイアにパンチで反撃するがファンガイアはそれを受け止めた。
「フン！！人間風情の小娘が！！！意気上がるなぁぁぁぁ！！！！」
ファンガイヤは空いていた左手の鋭い爪でメロディを引っ掻いて吹

き飛ばす！！
メロディ「きゃあああああ！」
「「メロディ！」」
「よそ見している場合か？」
リズムとビートは後ろを向くと他のファンガイアが既に後ろに立っていて、２人を攻撃した。
「「きゃあああああ！」」
「あ…あいつ等…」
春樹はやられている３人を見てそれを何度も容赦なく攻撃しているファンガイアに怒りが込み上げ始めた。とうとう我慢が限界になった春樹は立ち上がった。
「おいお前ら！いい加減にしやがれ！」
春樹の大声でファンガイア達は気付き、春樹の方へ向いた。
「ん？貴様はさっきの人間…ほほう、わざわざ死ににきたのか」
「ああ！（あいつなんで逃げなかったのよ！！）」
メロディは春樹を逃げすため立とうとしたが、怪我の激痛で立てなかった。
「うう！」
「お前ら、女の子を痛めつけて恥ずかしくないのか！？」
「フン、我々を人間と一緒にするな。我々は人間だったらたとえ女だろうが子供だろうが容赦は一切しない！」
ファンガイアの言葉で完全に怒った春樹は落ちてあったバットを拾った。
「お前らの相手は俺がしてやるぜ！」
「ははははは！人間が我々に相手するだと？だったら望みどうり、お前のライフエナジーを奪ってやる！」
ファンガイア達は春樹のライフエナジーを奪おうと一斉に襲いかかって来た。春樹はバットで殴るが、ファンガイアはそれを片手で止めた。
「うそ！？」

「言っただろ？貴様ごときが我々に敵わないと。さぁ、貴様のライフエナジーをもらうぞ」
ファンガイアは春樹の首を左手で絞めた。ファンガイアは春樹の首筋に近づいたその時だった。
キュアアアアアア！
突然春樹から強い光が走った。ファンガイアは驚き、春樹を放した。
「な、なんだ！？この光は！？」
「なんなのいったい！？」
「！あの紋章は！！」
ファンガイアは光っている春樹の胸に大きな紋章があった。コウモリの模様にしている紋章だった。
「な、何だこれ？」
「それはキバの印だぜ！」
上から声が聞こえ春樹は上を見た。そこにはなんとコウモリが飛んでいた。
「何だお前！？」
「貴様は！」
「俺様はキバット三世だ！よろくな！！キバのの子孫！」
「キバの子孫？」
「お前のその紋章はキバの鎧の所有者の血縁者の印だ！俺はお前を探してたんだ！」
「俺を探してた？どういう意味だよ？」
「ああー話しは後だ！まずは変身しろ！」
「変身ってどうやって？」
「お前のその光でベルト出すんだ！」
「だからどうやってやるんだよ！」
「その光に手で触ってみろ」
春樹はコウモリの言うとおりに光を触ると光はまた強く光り、春樹の腰に集まった。すると春樹の腰に赤いベルトが現れた。
「な、何だこのベルト？」

「それは俺の止まり木でもある『キバットベルト』だ。後はお前の腕を俺に噛ませて『魔皇力』を注入させれば変身できるぜ！そうすればお前はあいつ等に勝てるぜ！」
春樹は最初は自分のベルトを見て、次はファンガイア、そして最後は倒れているメロディ達を見た。
「おい。コウモリ」
「俺はコウモリじゃねぇ！キバット三世だ！」
「わかった。キバット。変身したら本当にあいつ等に勝てるのか？」
「ああ！もちろんだ！キバの鎧を信じろ！」
「……わかった。行くぜキバット！」
「よっしゃ！キバッていくぜ！」
春樹はキバットを掴み、自分の腕をキバットに噛ませた。
「ガブッ！」
キバットが噛むと、春樹の頬にステンドガラスの絵みたいな模様が現れた。
「変身！」
春樹はキバットにベルトに装填すると春樹の姿はコウモリに酷似した姿へと変わった。春樹はキバの鎧に纏った戦士・『仮面ライダーキバ』に変身した。

第3話　戦闘開始！キバVSファンガイア

『仮面ライダーキバ』に変身した春樹は自分の姿を見た、プリキュアとファンバイア達は驚いていた。
「春樹が…」
「変身した…」
「あれがキバ…名前だけは聞いたことあるけど、見るのは初めてだわ…」
「あの男…キバの鎧を使える奴だったのか！？」
「く…先に始末するべきだった…」
「これが…キバの鎧…」
「おお。こいつがキバの鎧さ！それじゃあ春樹、準備はいいな？」
「ああ！いつでも良いぜ！」
「おのれ…キバめ…ここで死なせてやる！」
ファンガイア達はキバを倒そうと襲いかかって来た。
「よっ、と。オラ！」
キバは軽々くかわし、一体のファンバイアにキックした。ファンガイアはそのまま他のファンガイアまで飛んで行った。
「「「ぐわぁ！」」」
「へっ、どうだ！」
「ぬぅ…やはりキバは手強い…」
「だが、やつはまだキバの力を慣れていない。奴を回りこむんだ！」
ファンガイア達はジャンプしキバの周りに囲んだ。
「おいおい、流石にこれはな～」
「春樹！ベルトに付いている青のフエッスルを俺に吹かせるんだ！」
「青のフエッスル？これか？」
キバはベルトに付いていてある青のフエッスルをキバットに吹かせた。
「ガルルセイバー！」
キバットが青のフエッスルを鳴らすと、キバとキバットの眼の色と

胸が青に変わり、『魔獣剣ガルルセイバー』が現れた。そして左肩には青い毛が立った外見になった。キバの姿は『キバフォーム』から『ガルルフォーム』へと変化したのだ。
「おお！すげぇ！剣が出てきた！」
「感心してる場合か！それで奴らを斬るんだ！」
「ああ、わかった！」
キバは素早いスピードでファンガイアの後ろに着き、ガルルセイバーで斬った。
「ぐわぁ！」
「え！？いまどうなったの！？全く見えなかった！？」
キバのスピードを見てメロディ達はかなり驚いていた。しかしそれはキバ本人も驚いていた。
「い、今のはなんだ？」
「これが『ガルルフォーム』の力だ。ガルルフォームはキック力、走力といった脚力が優れるんだ」
「すげぇ！キバの鎧って！」
「だから言っただろ？キバの鎧は強いって」
「よーし！この調子でいくぜ！」
キバ＝春樹はガルルセイバーを構え、再びファンガイア達と戦い始めた。キバ達がいる校庭に離れ、学校の屋上で黒いマントと仮面をつけているプリキュア『キュアーミューズ』がキバとファンガイアの戦いを見ていた。
「あれは…キバとファンガイアだドド！なんでこの世界にいるドド？」
キバの姿を見ているドドリーは驚きを隠せなかった。しかしミューズは黙ってキバの戦いを見ていた。
「よし！春樹！！ガルルセイバーを俺に噛ませるんだ！『ガルル・ハウリングスラッシュ』だ！！」
「ＯＫ！」
キバはガルルセイバーをキバットに噛ませた。するとキバ達の周囲

に満月が浮かぶ夜になった。
「あれ！？夜になった！」
「まだ昼なのに！！」
「決めるぜ！ガルルバイト！」
「喰らえ！ガルル・ハウリングセイバー！！！」
キバはガルルセイバーを口に加え走りだし、必殺技・『ガルル・ハウリングスラッシュ』を炸裂し2体のファンガイアを斬った。一刀両断すると2体のファンガイアにオオカミのような紋章が現れ、爆破した。
「す、すごい！」
「私達が全く敵わなかったファンガイアに…」
「あれが…キバの鎧…」
キバは最後の1体のファンガイアを見て、キバットに言った。
「ねぇ、キバット。こいつには最初の姿の奴で倒していい？」
「ん？なんでだ？」
「さっきの奴らにはもう倒しちゃったけどよ、あいつはあのキュアメロディやリズム、そしてビートにひどいことをしまくったから、あいつ等の分は俺がやる。いいだろ？」
「わかったぜ」
キバットはそう言うとキバはガルルフォームからキバフォームに戻った。
「さぁ。掛かって来な！あいつ等の仇だ！」
「フン！2体を倒したからって言い気になるな！」
2人は走り出し、キバとファンガイアの格闘戦が始まった。
「はあああああ！」
「くっ！キバになったばかりなのにこれほど強いとは…」
ファンガイアは右手に爪を出し、キバに引っ掻こうとしたがキバはそれを右手で掴んだ。
「何！？」
「これは…キュアリズムの分だ！」

キバは掴んでいない左手で殴った。ファンガイアはその衝撃で後ずさった。
「ぐわぁ！」
「これはキュアビートのだ！」
キバはそれを見逃さず、蹴りを入れた。
「そしてこれが―」
「春樹！最後は『ダークネスムーンブレイク』で決めるぞ！赤いフエッスルを吹かせるんだ！！」
「いきなり声掛けるな！まぁ、やるけどよ」
キバはベルトにあった、赤いフエッスルを出し、キバットに吹かせた。
「ウェイクアーップ！！」
キバットがウェイクアップフエッスルを鳴らすと、今度は周囲が三日月が浮かぶ夜空になった。その同時にキバの右足に拘束していた鎖が開放した。
「また夜になった！」
「どうなってるの！？」
「よし！キバッて行くぜ！春樹！」
「おお！行くぜ、これがキュアメロディの分だ！『ダークネスムーンブレイク』！！」
キバは上空にジャンプし、キバフォームの必殺技・『ダークネスムーンブレイク』を炸裂した。キックすると今度はキバの紋章が現れ、爆破した。
「ぐわあああああ！」
ファンガイアを倒した、キバは変身を解き、春樹に戻った。
「ふぅー。結構ヤバかったな…」
「よくやったぜ春樹！流石だぜ！」
「お前が支持してくれたおかげだよ」
「いいや。お前の実力だぜ！」
「へへ、照れるな。あ、そうだ！」

春樹はファンガイアにやられていたメロディ達の所へむかった。
「お前ら大丈夫か？」
「うん…大丈夫だよ」
「助けてくれてありがとう」
「まさか、キバに会えるなんて思わなかったわ」
「え？お前、キバのこと知ってるのか？」
「え、ええ。大体ね」
「へぇ…そうだ、お前大丈夫か！？さっきの奴に引っ掻かれたけど」
「え？だ、大丈夫だよ！この通り！」
春樹はメロディが引っ掻かれた所を見た。見た感じ傷は深くなかった。運良くかわしたのだろう。
「そうか…こっちも助けてくれてサンキューな」
「ううん、助けるのは当たり前だよ！」
（なんかこの3人…親しみやすいな…あ、あれ？周りが…）
春樹は急に視界が見えなくなり、倒れた。原因はキバットが春樹を噛み、眠らせたのだ。
「は、春樹！ちょっとアンタ！春樹に何したの！？」
「大丈夫だ、少し眠らせただけだ。お前等は確かプリキュアだったよな？正体をバラしたらマズいだろ？」
「え？あ、うん」
「あなたプリキュアのこと知ってるの？」
「ああ。でも今は詳しく言えねぇ。だがいずれ話すからよ」

それからしばらく気を失っていた春樹は保健室で寝ていたのは別の話。

第４話　勇二の覚悟！闇のキバ参上！（前書き）

今年最後の投稿です！最後の部分だけ、２話と似ているかもしれません…

第４話　勇二の覚悟！闇のキバ参上！

翌日
響達は調べの館で集まっていた。エレンが昨日春樹が変身したキバの事について説明をするためだ。
「それでエレン。キバってなんなの？」
「キバはその昔、ファンガイアがメイジャーランドに襲われていたことがあったの。その時にキバがメイジャーランドに現われたの。キバは音楽を心から愛してた人だったわ。」
「音楽を愛してた…（確かにあいつもそうだったね）」
「でも、どうして春樹がキバになったのかな？もしかして昨日春樹から光ったあれが関係してるのかな？」
「あの時現れたキバットが言ってたでしょ？「あれがキバの鎧の所有者の血縁者の印だ」っておそらく春樹君は昔のキバの子孫なんだわ！でも少し変だわ…」
「なにが？」
「私が聞いた話しだとメイジャーランドに現われたキバは２人だったはずなのに昨日は１人だったわ。でももう一人のキバはいったい…」
「それは『ダークキバ』です。」
突然何処からか声が聞こえ声の所へ向いた。そこに宝箱が光り、開いた。これは響達がフェアリートーンを助けるために魔響の森の試練を乗り越え、手に入れたアイテム・『ヒーリングチェスト』だ。そしてその中から声の主は、フェアリートーンの生みの親、『クレッシェンドトーン』だ。
「クレッシェンドトーン、何か知ってるんですか？」
「はい。かつてメイジャーランドの危機を救ったキバともう一人のキバは『ダークキバ』という戦士です。彼も音楽を心から愛している人でした。しかし、ファンガイアの封印が解いてしまうなんて…

響、奏、エレン。あなた達は昨日、キバと会ったそうですね。誰だったんですか？」
「はい、仲村春樹って名前で私の幼馴染です。」
「そうですか…3人とも、ファンガイアはまた現われます。その時は彼と協力して下さい。」
「「「はい！」」」
3人は春樹を助けるという覚悟を決め、頷いたその時だった。
「おーい！響、奏！」
突然の大きな声で響は危うくヒーリングトェストを落とすところだった。響達は素早くヒーリングチェストを隠した。
「は、は、は、春樹！驚かさないでよ！！」
「別に驚かそうとは思ってねぇよ」
「いきなり声を掛けてくるからでしょ！」
春樹は何で自分が怒られるんだっと疑問を思いながら響達を見ていた。
「そう言えばお前らなんか大事そうに持ってたよな？何持ってるんだ？」
「あ、えっと…これは…」
「オ、オルゴールなの！」
「ふうん。まぁいいや。」
春樹は興味ないのか話しを止めた。すると春樹はエレンと目に合った。
「あ、お前は確か転校生の―黒川、だったよな？」
「ええ、黒川エレンよ。」
「そうか、じゃあさ、お前の事エレンって呼んでいいか？」
「ええ、いいわよ」
「そっか。じゃあよろしくなエレン」
「ところで春樹何しに来たの？」
「え？ああ、暇だから調べの館に行こうかなっと思ってな。ちょっとここでヴァイオリンを弾こうと思って」

「えっ！ヴァイオリン弾くの！？やってやって！」
春樹がヴァイオリンを弾くと聞いた響は急にテンションが高くなった。
「どうしたの響？」
「響は小さい時から春樹のヴァイオリンが好きなの。春樹はああ見えてヴァイオリンすごく上手いの」
「へぇ、私も聞きたい！いいよね？」
「おお、いいぞ」
春樹はヴァイオリンケースからヴァイオリンと楽譜を出した。
「じゃあ、いくぜ？」
春樹は椅子に座り、ヴァイオリンを弾き始めた。ヴァイオリンからとてもきれいな音色が鳴り響いた。響と奏ではとても嬉しそうに聞いていた。エレンは驚いた表情で春樹を見ていた。
「すごく上手…」
「春樹のヴァイオリンを聞くとなんだか落ち着くんだよね」
「ホントだよね…」
しかし春樹は途中ヴァイオリンを弾くのを止めた。
「どうしたの春樹？」
「……なんか変」
「え？なにが？」
「音色が」
「え？」
春樹はもう一度ヴァイオリンを弾こうとした。するとヴァイオリンが勝手に音色が鳴り響いた。
「な、何だこれ！？」
「ええ！？ヴァイオリンが―」
「勝手に弾いてる！？」
「ま、まさか…幽霊！？」
響と奏は怖くなり春樹から離れ、エレンはその2人の後ろに隠れた。
「何がどうなってるんだよ！？」

「おい、春樹！」
突然声を掛けられ春樹は調べの館の入り口を見た。そこにキバットがいた。
「キバット！！今手が離せないんだよ！」
「そんなこと言っている暇はねぇんだよ！！ファンガイアがまた現われたんだ！！」
「ええ！？こんな時に！？こっちヴァイオリンが勝手に音が立っているのに！！」
「！お前、そのヴァイオリンは『ブラッディ・ローズ』じゃねぇか！？なんでお前持ってるんだ！」
「『ブラッディ・ローズ』？何それ？」
「ファンガイアを察知するためのもんだ！いいから早く行くぞ！」
春樹は急いでヴァイオリンをケースに入れ、キバットの所へ向かった。
「キバット！何だよ『ブラッディ・ローズ』って？」
「説明は後回しだ！」
春樹とキバットは現場に着くとそこにはスパイダーファンガイアがいた。春樹は立ち止まるとすぐそこに勇二がファンガイアに襲われる寸前だった。
「勇二！お前ら勇二から離れろ！」
春樹はファンガイアの一人に蹴りを入れファンガイアは倒れた。
「勇二、大丈夫か！？」
「春樹！何か分かんないけどあいつらやばいよ！逃げよう！」
「そんなこと言ってられるか！キバット！」
「よっしゃキバッていくぜ！ガブッ！」
「変身！」
春樹はキバに変身し、スパイダーファンガイアと戦い始めた。
「春樹が…変身した…」
「お前ら、俺のダチに手を出した罪はデカいぜ！覚悟しな！」
「春樹！今日は緑のフェッスルで行くぞ！」

「ああ！」
キバは緑のフエッスルをキバットに吹かせた。
「バッシャーマグナム！」
キバットがフエッスルを吹くとキバの鎧が緑になり、右腕が半漁人の魚になり、右手に魔海銃バッシャーマグナムが現れた。キバは『バッシャーフォーム』になった。
「行くぜ！」
キバは『バッシャーマグナム』を連射した。「春樹…」
勇二は闘っている春樹を見て、自分も春樹と一緒に闘いたい気持ちが溢れた。しかし今の自分は何もできない。己の無力さを悔やんだ。その時だった。
勇二の胸にキバの紋章が現れた。それを見た春樹とファンガイアは驚いた。
「あれは、キバの紋章！」
「な、なんだこれ！」
「やはりお前だったか。」
勇二は上を見るとそこにキバットに似た黒いコウモリが現われた。
「ああ！父ちゃん！！」
「ええ！？お前、父ちゃん！？」
「久しぶりだな息子よ。鎧の所有者を見つけたのか。」
「君は？」
「そうだ。紹介してないな。俺は『キバット2世』だ。よろしくな。『闇のキバの子孫』よ」
「闇のキバ？」
「そうだ。お前は奴と同じ、キバの鎧を持つ者だ。俺がお前に力を与えよう。ありがたく思え。」
キバット？世の態度を見た春樹は少しムッとしていた。
「なんだあいつ？偉そうに」
「父ちゃんはああなんだ。でも嫌な奴じゃないから大丈夫だ」
「お前名前は？」

「え？立花勇二だよ」
「そうか。勇二。いまから俺の言うとおりにやるんだ。そうすればお前はダークキバに覚醒する。覚悟はいいか？」
勇二はキバット2世の言葉を聞き、春樹を見た。春樹は黙って頷いた。
「あるよ。僕は春樹を助ける。」
「よし、分かった。ではまず、その紋章に手を触れてみろ。」
勇二はキバット2世の言うとおりに紋章を触った。すると勇二の腹部に黒いベルトが現われた。
「これは…？」
「それは『ダークキバットベルト』だ。さぁ俺を噛ませろ。」
「噛むってどうやって？」
「簡単だ。お前の手を俺に噛ませるんだ。『魔皇力』を注入させればお前は変身できる。」
「わかった。じゃあ、行くよ！キバット！！」
「おお！」
勇二はキバット2世に自分の腕を噛ませた。すると勇二の頬に春樹と同じ、ステンドグラスの絵のような模様が現れた。
「変身！」
勇二はキバット2世にベルトを装着すると勇二の全身に黒いキバの鎧が装着した。勇二は闇のキバ・『仮面ライダーダークキバ』に変身した。

第４話　勇二の覚悟！闇のキバ参上！（後書き）

読んでいただいた皆さん！今年はどうもありがとうございました！
よいお年を！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3112z/

スイートプリキュア＆仮面ライダーキバ＆Ｗ 心の音楽とそれぞれの想いと覚悟

2011年12月31日20時50分発行